

サッカーにはまった話

桜井 悌司

はじめに

41年間の日本貿易振興機構（JETRO - 以下ジェトロ）生活ではまってしまったことが2つある。サッカーとオペラである。サッカーの魅力にとりつかれたのは、1966年のワールドカップ英国大会を記録した「ゴール」という映画を見たことに始まる。イングランドが優勝したのだが、観客のすさまじい熱狂ぶりと試合展開のスピードに強い感銘を受けた。

その後、スペイン、イタリア、メキシコ、チリ、ブラジルというサッカー大国に15年半滞在したが、その間、チャンスがあれば、抜かりなくサッカーやスタジアム見物に出かけた。サッカーの魅力にはまったのは、2つの理由からである。1つは、各地で超一流のプレイヤーを見ることができたことである。ブラジルのリベリーノ、ロナウド、ロナウジーニョ、レオナルド、アルゼンチンのマラドーナ、バティストエータ、テベス、チリのサモラーノ等々身近に見たせいである。もう1つの理由は、家族そろって見る機会が多く、家族で楽しんだからだと思う。

チリ駐在時の1987年には、サンティアゴでFIFA ワールドユース選手権が開催された。10試合の通し券を3枚購入し、3人の子供たちを順繰りに国立競技場に連れて行った。チリは堂々3位になったが、みんなで応援した。またチリが誇る最高の選手の一人と言われるカルロス・カセリー選手の引退試合も

家族揃って行った。家族で近隣諸国を訪問した際にも、リオのマラカナン・スタジアムで試合観戦、第1回ワールドカップの決勝戦が行われたモンテビデオのセンテナリオ・スタジアムやブエノス・アイレスのリーベル・プレート・スタジアムを見学した。イタリア駐在時代には、ACミランとインテルのシーズン・チケットを購入し、3男と順番にサンシーロ・スタジアムに出かけた。ペルー時代の中田も活躍していた。1998 ワールドカップ フランス大会では、幸運にも、リヨンで行われる日本対ジャマイカ戦のバス・ツアー・チケットを3枚入手した。ミラノにいた3男と東京から呼び寄せた次男の3人で出かけた。日本は敗戦したが、中山選手が日本人として、カップ史上初めてゴールした試合であった。次男の呼び寄せ航空賃、入場料、バス代、ホテル代も合わせ、しめて30万円かかった。イタリア駐在時代には、数えてみれば42回サッカーを見学した。日本のサッカーマガジンにも「Jリーグを発展させるには-セリエAに学ぶ」という記事も寄稿し



ミラノ・サンシーロ・スタジアムの内部風景
(1998年 桜井撮影)

た。

日韓共催の2002 ワールドカップも一族郎党で応募したところ、準々決勝戦が当たり、息子たち3名を引き連れて、静岡のエコバ・スタジアムでブラジル・イングランド戦を観戦することができた。ブラジルのロナウド、リバウド、ロナウジーニョの三羽鳥やベッカムがプレイしていた。ここでもチケット代、新幹線代等でここでも20万円を散財した。

思えば、サッカーには結構なお金を費やしたが、当然ながら満足



ワールドカップ・日本・韓国開催 静岡エコバ・スタジアムでの順々決勝
ーブラジル対イングランド スコアの映像
(2002年6月 桜井撮影)

の投資であった。

サッカーを通して考えたこと

(1) 地元に密着するということ

世界のいずれのプロリーグでも各チームは地元に密着している。日本でも当時のJリーグの川淵チェアマンが強力に主張し、そうになった。イタリアでは、年間のシーズン・チケットの売り上げ枚数が新聞に公開されている。当時のセリエAチーム18チームのシーズン・チケットの売り上げは、スタジアムの収

容能力の50%から70%であった。金額は、正規の金額が100とするとシーズン・チケットの値段は55になり、女性や子供はその30%引きで39となるので比較的買いやすくなっている。当時、大宮アルディージャに問い合わせたところ、10%程度ということであった。Jリーグももっと地元に着することを真剣に考えるべきである。せめて3割くらいがシーズン・チケットの売り上げとなることを期待したい。

(2) 出稼ぎ国にみるブラジル選手とアルゼンチン選手

ラテンアメリカのサッカー選手にとって、欧州等でプレイすることが夢である。ひとたび欧州等に渡ると収入が飛躍的に増加し、知名度を高めることに繋がる。ブラジルもアルゼンチンもサッカー大国ではあるが、プレイする国を選ぶに際して、かなりの違いがあるように思える。ブラジルの場合は、開放的かつ外向きで、アラブでも中国でも共産圏でも、まさに世界のどこへでも出かけて行く。一方アルゼンチン人は、もっと内向きである。行先は、もちろん例外はあるが、宗主国のスベ

インと移住者が多いイタリアにおおむね限定されている。日本にも、ブラジル人プレイヤーは多いが、アルゼンチン人は少ない。昔、横浜マリノスにいたラモン・デياسは例外的である。チリ人は、アルゼンチン人ほど内向きではないがブラジル人ほど開放的、外向きではなく、その中間である。

(3) ブラジル代表ロナウド選手にみるフォワードの役割とヨーロッパ・ドリーム

フォワードの役割は言うまでもなくゴールすることである。極端に言えば、通常はほとんど動かずとも、ボールが来たときに迅速に動き、シュートを打ち得点するのがその役割である。インテルに入団したブラジル代表のロナウド選手の動きを何度か見ているうちに、この選手の行動範囲はかなり限定されている、すなわちあまり動かないことがわかった。日本人の場合、フォワードでも、ピッチを駆け巡り、時にはディフェンスの役割をも果たすとチームのためによく頑張っている」と評価される傾向にある。日本人のチームワーク精神と勤勉志向か

ら来ているのだろう。しかし、よく考えてみれば、フォワードは、チャンスの時には、いち早く動き、集中して、ゴールに繋げるのが仕事である。ロナウド選手の場合、ボールを受け取ってからの初動の動作やフェイントは、普通のフォワードの5%か10%くらい早いような印象を受ける。FCバルセロナのメッシ選手は、ロナウド選手よりよく動くが、いざとなるとスピードが俄然加速化され、相手方のディフェンスがついていけなくなる。日本のフォワードもピッチを駆け巡らなくても良く、いざというときに確実にゴールしてもらえれば良い。ロナウド選手の移籍金の推移をみると、ラテンアメリカ出身のサッカー選手にとって「ヨーロッパ・ドリーム」とは何かを理解できる。彼がミナスジェライス州の「クルゼイロ」から1994年にオランダの「PSV アイントホーフェン」に移った時は60万ドルであったが、1996年のスペイン「FCバルセロナ」の移籍時には、1,700万ドル、97年イタリアの「インテル」移籍の際は、1,900万ポンド、2002年の「レアル・マドリード」に移った時は、3,900万ドルに跳ね上がったと報道されている。貧困脱出どころか一躍大金持ちに変身することになる。眼の色が変わるわけだ。

(4) 選手、監督、審判を評価する

イタリアで夜に放映されるサッカー番組を見ると、非常に興味あることがわかる。サッカー解説者が、プレイした選手を一人ずつ採点するとともに、監督や審判なども厳しく評価する。翌日の新聞を読むと、選手の評価が10点満点でなされる。6点がまずまずで、なかなか7点や8点がもらえない。全く活躍



サンパウロのモルンビー・スタジアムの風景 FC サンパウロ—コリンチャンス戦 (2005年 桜井撮影)

しなかった選手は、SC（評価するに値しない）ということになる。選手、監督、審判の評価は、同じくスペインやブラジル、その他ラテンアメリカでもなされる。日本の場合、このような制度がなく、それほど活躍しなくても、〇〇選手は勝利に貢献したというあいまいな報道がなされる。日本サッカーがもっと強くなるには、選手の評価採点制度を確立することが必要である。それには、解説者の見識やサッカー記者の実力を高めることが必要なのである。

(5) サッカーと治安問題

ラテンアメリカでサッカー見物をする時は、十分注意するようにとよ

く言われる。何故と聞くとあいまいな返事が返って来る。多くの人は、サッカーに出かける際に起こるピストル強盗等盗難による危険とファン同士の争いに巻き込まれる危険をごっちゃにしているケースが多い。どちらのケースでも十分対応可能である。ピストル強盗への対応は、短パンとTシャツといったいつ襲われても良い服装で出かけ、クレジットカードや大金を持たず、小銭をいくつかのポケットに分散し、最悪の場合に備え、タクシー代を靴下に入れておくようにすれば良い。そして、暴漢に襲われれば、決して抵抗せず、ポケットのすべての小銭を快くお渡しするという方法である。暴漢は人殺しをする

のが目的ではなく、所持金を奪うのが狙いである。ファン同士の争いも回避できる。どういう試合展開になれば、争いが起こるのかを分析すればよい。試合内容が緊迫していれば、どちらのチームのファンも満足するので、争いはまず起こらない。しかし、5対0とか4対0のように一方的な試合になると争いの確率が高くなる。勝った方が挑発したり、負けた方がヤケソになるからだ。試合展開を見て、雲行きが危うくなれば、10分前にスタジアムを後にし、ずらりと並んでいるタクシーに乗り帰宅すればいいのである。

（さくらいていじ ラテンアメリカ協会理事）

ラテンアメリカ参考図書案内



『原家の砂時計 一居場所を求める百年の旅路』

篠田 顕子 悠書館

2016年8月 244頁 2,000円＋税 ISBN978-4-86582-014-0

1931年に岡島元七郎の4歳の恵子を含む一家6人は、大阪商船ブエノスアイレス支店に赴任し39年までの約8年間を過ごした。健全で幸せな家庭生活だったが、第二次大戦の勃発と岡島のシンガポール転勤で終わり、岡島は45年帰国途上に乗船していた戦時病院船が米軍潜水艦に撃沈され帰らぬ人となった。

戦後、教員になっていた恵子は、ブエノスアイレスに踏みとどまって成功を収めた原商会の原 昇・カズ夫妻に乞われて養子縁組し再びアルゼンチンに渡る。日本で見合いし入り婿となった修と二男二女に恵まれるが、仕事では昇と修は折り合いが悪く、原商会も時代の変化に翻弄され衰退、修は後年癌が発症し72年に享年46歳で亡くなった。その後子供たちも成長し、長女あやはアルゼンチン人の同級生ホルへと、二女涼は医科大学を出た在留邦人進と、長男素も日本に研修留学した際に知り合った康子と、末子光は空手を通じて知り合ったパメラとそれぞれ結婚し（後に離婚し晶江と再婚し娘をもうけるが離婚）、皆子供も授かった。恵子も91年64歳の時に養父の友人で旅行会社を経営する二世松堂昭と再婚したが、昭は2006年に病死した。物語は老いた恵子と子供、9人の孫たちの今に至る消息と家族生活を伝える。

著者（アキコ）が一族から聞き取った原家のおよそ百年にわたる家族史は、恵子がアキコに語った「ふるさととは日本、でも居場所はここブエノスアイレス」で終わる。これまでの移民史にはなかったアルゼンチンと日本との間で交差した家族の数代にわたる物語り。

（桜井 敏浩）